

異世界  
独り立ち  
プロジェクト!

モノ作りで  
あなたの思い出  
修復します。



## デリラ

食堂『銀の匙亭』を切り盛りする女性。大らかで面倒見の良い性格。

## セレン

デリラの子供。優しく努力家だが、病弱で泣き虫な一面もある。

## シルバ

スバルをサポートする精霊。普段は黒猫の姿をしているが、スバルの身に危険が生じた時は人型に変身する。

アリス ガワ スバル

## 有栖川 昂

ブラック企業を辞めて心機一転、転職活動が始めるが超適当なカミサマのせい而异世界へ。元の世界に戻る方法を見つけるため、まずは異世界の町・メタラムで自立を目指す。

## 登場人物紹介



## キキーモラ

町の伝承に出てくる妖精。  
スバルに興味を持ち、動  
向を見守っている。

## ハーティ

町長の娘でアウラムとレ  
ニウムとは幼馴染み。  
スバルに対抗心を抱く。

## ニオブ

町で診療所を開くセレンの  
主治医。仕事熱心  
で身嗜みには無頓着。

## アウラム

物腰柔らかく気品漂うレニウムの  
兄。冒険者の弟を気にかけている。

## レニウム

新参の冒険者。明るく人懐っこい  
タイプで『銀の匙亭』の常連客。



# CONTENTS

プロローグ	006
-------	-----

## 第一章

そうだ、独り立ちをしよう

012

幕間 シルバは、それを知らない	048
-----------------	-----

幕間 なんとかなるし、なんとかしよう	054
--------------------	-----

## 第二章

手の中の宝物

060

幕間 たくさんあった、ごめんなさい	113
-------------------	-----

## 第三章

それは、きっかけに過ぎない

119

幕間 荷物を少し分けろとふんどった	166
-------------------	-----

幕間 次期領主のオシゴト	172
--------------	-----

## 第四章

新しいものが、見えてくる

179

幕間 いつかはと思っていた	236
---------------	-----

## 第五章

はじまりのうた

241

番外編 眠れる猫が、目覚めたら	284
-----------------	-----

番外編 ずっと、みていた。はじまりから	289
---------------------	-----





## プロローグ



「シチューお待ちとおさまです、以上でご注文はお揃いですか？ ごゆつくりどうぞー！」  
町の賑わう食堂、その名も『銀の匙亭』で看板娘を務める私、有栖川 昴は今日も元気に働いて  
おります!!

職場環境にも恵まれ、元気に働いています。……なんと、異世界で。

そう、声を大にしてもう一度言おう。

異世界で!!

なにを隠そう、私は異世界人なのだ。

……いや、これだけ言うとはント、ないわあー。どこの夢見る乙女だよって感じだね!?

言っておくけど、私は別に特殊な人生なんて歩んできてはいない。

ごく平凡な一般家庭に生まれて、時計職人であるおじいちゃんの影響でハンドメイドを始めたくらいで、後はもうあらゆる意味で本当に平々凡々だ。

いつか自分のお店が開けたらいいなあって夢を持っていたけど、まあ現実には厳しいわけで……。夢のためにも貯金をしようと思って就職したら、就業時間ナニソレ美味しいの？ パワハラセクハラ当たり前なブラック企業だったっていうね？

なんとなく洗脳じゃないけど……こう、辞めるって声に出せない状態になってそのままずるずる社畜してたら、驚いたことに会社の方が夜逃げしたんですよコレが!

まあ、そのおかげで負のスパイラルから抜け出せたんだけど。

そしてつい最近、疲弊した心も体も治ったことだしそろそろ再就職をしようって決意した。

私、ポジティブが取り柄なんで。なんとかなるなる！ この精神大事。

美容院に行つて、スーツも新調して、面接の電話や履歴書だつて万全だった。

ただちよつと緊張していたんだよね。そう、緊張してたんだよ。

その緊張をほぐそうと、フリーゲームをダウンロードして始めてみたらあら不思議！

『誰でも良かったんだ。誰かが異世界に行ってくれたらね。あとは好きにしたらいい。勿論、こちらの世界で不便がないよう色々サービスしておくし、あくまで——』

……と、まあ、なんにも納得できないまま姿も見せない自称カミサマの、その理不尽なセリフと最低限の説明だけで異世界に放り出されたっていうね。納得はしていない！

しかもなんとスタート地点は森の中。思わず「なんでだよ！」と突っ込んだ私は悪くない。

普通、サービスばっちりスタートでしょ。

変な獣が出てくる森の中ってそれだけのハードモードだから！

そんなわけで異世界に着いて早々人生迷子になりかけた私は、命からがら森から脱出したところで、近くの町にある『銀の匙亭』を営むデリラさんとセレンちゃんおやこ母娘と出会い、お世話になつて  
いる……とまあ、そういう感じ!!

「ご主人様、休憩入るにゃん？ お疲れ様になん」

「……シルバはいいよねえ、日がな一日ゴロゴロしてるだけだもんね……」

「失礼にゃん。看板猫として、ボクはちゃんとこうして愛嬌を振りまいてるにゃんよ？」

置いてあったお昼のサンドイッチの皿を持つと、待ってましたとばかりに頭の上に乗ってくるこの黒猫はシルバ。私の異世界生活を円滑にするためのサポート役だ。

超適当な召喚理由を述べたカミサマが言っていた『サービス特典』ってやつらしい。

艶やかな黒い毛並み、赤いルビーみたいな色のくりつとした目、片耳の先っぽだけ銀色なのがなんともおしゃれな美猫。その正体は猫じゃなくて、精霊らしいんだけど……正直よくわからない。

私の好みドンピシャの美猫なんだけど、どうにも時々毒舌だし、なんかこう、曲者くせものっぽいっていか。いや可愛いから許すけど……。くつ、猫好きな自分が悲しい。

だって私の飼い猫ってわかるように咄嗟とつさに作った首輪を、ドヤ顔でセレンちゃんに見せびらかしとるところとか絆たされるなって方が無理……可愛い……!!

まだ他にも『特典』とやらがある。この世界の言語については自動翻訳らしく、日本語じゃない言葉だつてのはわかるけどきちんと日本語に聞こえるっていう……なにを言っているかわからない？ 私だってわからない！

あと、オマケみたいな特殊スキルももらった。

「こっちの世界に来てすっかり馴染なじんだにゃんね、スキルは使い慣れたにゃん？」

「慣れるわけないでしょ、あんなランダムで低発生のスキル！　なんでこう、もっと実用的なのにしてくれなかったワケ!?!」

「ボクに言われてもにゃあ〜」

「しかもあのダッサイ名前！」

「それについてもボクに言われてもにやあ〜」

強制的に異世界に連れてこられた私専用のスキル。

名前を【桃色はっぴー☆天国】<sup>パラダイス</sup>。

初めて見た時に、ナニコレ頭悪そうって思った私は悪くない。絶対に悪くない！

まあ名前がとんでもなくダサイだけでなく、使い勝手もかなり微妙なスキルなんだ……。

「もっと実用的なのなかったの？ こう……超スゴイ攻撃魔法とかさあ」

「ご主人様は町中で平和に暮らしたいタイプなんだから、そんなの宝の持ち腐れにゃんね」

「ぐっ、否定できない……確かにこのメタラムはいい町だよ」

「ならこのまま異世界生活をエンジョイしちゃえばいいにゃん。イージーイージー！」

「簡単に言ってくれないで!？」

軽い調子で言ってくるシルバにむっとしながら、二階にある私の部屋から外の景色を眺めつつサ  
ンドイッチを頬張った。

ヨーロッパみたいな町並みだけどやっぱりどこか違うこの町並みも、最近じゃ見慣れたものだ。

「私は！ まだ！ 穩便に戻る方法を諦めてないんだからね！」

私が町の外を見ながらそう言うと、シルバはただ、面白そうに目を細めただけだった。

あつ、今こいつ笑いやがった……やれるもんならやつてみるってか？

戻る方法が人生の終わりを迎えると現実に戻る、いわゆる『死に戻り』だなんて字面的にも私に

はかなりハードルが高いんですけど。

聞いた時はもう、ひっくり返るかと思ったわ……。

でも、諦めるわけにはいかない。穏便に帰る方法が、この世界のどこかにはあるはずだ。

「……戻る方法を探しながら、お世話になった人たちに恩返しもしたいな」

「ご主人様は義理堅いじゃんねえ」

「こういうのは大事なもの」

お世話になったんなら、そのお礼をする。

そういうことを蔑ろにするのは人の道に外れることだっておじいちゃんが口を酸っぱくして言っていたからね。

……ぶっちゃけ、この異世界生活は案外、悪くない。

人間らしい暮らして言ったら大袈裟かもしれないけど……私のことを誰も知らないこの場所は、変に同情されることも心配されることもなく、のびのび生きられる。

でも同時に、納得していないからこそ帰りたいというのも正直な気持ちなのだ。

ものすごくやり残したことがあるとか、そんな情熱的な理由があるわけじゃない。

穏便に帰る方法が見つかったとして、お世話になった人にはきちんとお礼をしてからじゃないとスツキリ帰れないしね！

義理と人情、人との繋がりがや関係は大事にしなきゃ!!

「それじゃあ、まずは独り立ちしなきゃいけないじゃんねえ」

「うっ……」

「セレンちゃんにお世話焼かれてるようじゃあ、大人として立つ瀬がないじゃん」

「ううっ……」

「まあそこはボクがきつちりサポートしていくから、あとはご主人様のやる気次第にゃん！」  
尻尾をゆらゆら、嬉しそうに言うシルバに私はちよっぴり申し訳ない気分になる。

異世界生活初日から数日の間はなかなかこの現実が受け入れられなくて、シルバの説明も右から左でそれを振り切るみたいにデリラさんに頼み込んで働かせてもらってようやくよく落ち着いて将来のことを考えられたからさ。待っててくれたんだよなって思うと……ね。

だからってこの異世界召喚について納得はしていないし、するつもりもないけど。

「やる気ねえ……そうだよね。いっちょ、異世界生活張り切ってやってみよう！」

「お、ご主人様が張り切ってるにゃん、えいえいおー」

「ちよっつと、その気の抜ける応援なによ!？」

私の抗議をよそに、くあ、とあくびするこの猫、本当にサポートする気あるのか。

……でも、シルバは私がこちらの状況に戸惑った時にこう言った。

この世界に、元居た世界のような縛りはない。いつか戻る私は、自由なんだって。

あつちにいた時にやれなかったことや、してみたかったこと、知らないこと、色々なことが体験できるかもしれない。……もしかしたら、諦めかけていた、アクセサリー作りだって。

ここでもらお店を持つことだって夢じゃない？

それならもう腹を括るしかない。

異世界上等！ 私は前向きに帰る方法を探しつつ、この世界を楽しんでやるうじゃないの！



## 第一章 そうだ、独り立ちをしよう



とはいえ、私が腹を括ったところでここは異世界。

私を知る常識とは、ところどころ違って当たり前の世界……。これがなかなか難しい！

覚悟を決めた日からさらに数日経ったけれど、それでなにか大きな進展があつたわけじゃない。

今の所はお勉強の日々なのだ。

この世界では誰もが自由に魔法を使うことができるが、私はまだ使えない。

魔法のない世界出身の私からしたら未知なものわけですよ。鍛冶屋さんの炎が自前だとかって、

普通思わないじゃない……。

(シルバによるとこの世界の人は誰もが魔力を持っているので、それをどうしたいのかイメージして体外に放出するのが魔法ってこと。だから、人それぞれやり方が違うのも納得できる)

異世界人である私も『この世界の住人としての体』がある以上、魔法は使えるはずだとシルバは断言した上で必要に応じて教えると約束してくれた。

だから、これから空き時間を見つけて練習していくつもり。

なんでもすんごい魔法を使おうと思うなら、『世界の力』ってやつを借りなきゃいけないからそれに見合った知識が必要になるらしく、優秀な魔術師になりたい人は王都にある学校に通うんだとか。

まあその辺りは私関係ないかな！

今、私に必要なのはこの世界で暮らすのに必要な常識と、生活に困らないための魔法と、それか

ら生活費を稼ぐ方法なんだから。

(いつまでもデリラさんのお世話になっているわけにはいかないもんね！)

まあ魔法が使えなくてもこの世界には『魔道具』っていう魔法の代替品みたいなアイテムがあるから、困らないっていえば困らないんだけどね。ただ、それなりにお金がかかるのが難点。

普通に暮らしている分には人力的なものが中心で、専門職とかになると魔法が欠かせないものなんだとか。デリラさん曰く、お金持ちの家だと全部魔道具で構成されている便利なキッチンなんてものも存在するらしい。

(システムキッチンみたいなものかな……いや多分違うな)

魔法で一瞬にして片付くんならそれが便利だろうけど、結局そんな上手い話はないんだよね。

そんなことを思うのは、きつと近所の樵きこりさんから薪を買って運ぶ最中だからだと思っ。

セレンちゃんと一緒になので、大人の私が弱音を吐くわけにはいかないから脳内でこうしてくだらないことを考えているんだけども。

「セレンちゃん、重かったら私ももう少しくらい持てるよ？」

「大丈夫だよ、ありがとうスバルおねえちゃん。働き者には良いことがあるんだから！」

「……えつと、なんだっけ。妖精のキキーモラ、だっけ。怠け者は悪戯いたずらされちゃうんだよね」

「そうよ！ だから、ちゃあんと働かなくちゃ！」

お伽噺とぎばなしのキキーモラ、それはセレンちゃんのお気に入りらしい。

異世界転移の説明が上手くできそうにないので記憶喪失ってことにした私に対してセレンちゃんが色々話を聞かせてくれた時、一番熱量をもって語ってくれたんだよね。

(……ぬいぐるみも見せてもらったけど、なんか不思議な生き物だった……)

一応ほら、大人ですから！ 可愛いねって言うておいたよ！！

そんな可愛らしいセレンちゃんが、今までこの新運びを一人でやっていたっていうから驚きだ。今年で十歳だっていうのにしっかり者で頭が下がる思いなんだけど、セレンちゃんは病弱で時々咳き込んでるし、今もあまり顔色が良くない。

私が転がり込んでから、セレンちゃんが熱を出して寝込むことが何回かあった。

最初は私っていう他人が転がり込んだせいだって慌てたんだけど、デリラさん曰く日常的なものだから気にするなあって……一緒に暮らしている間に、この子がどんなに良い子か知ったから私としては気が気でないよ！

「……じゃあ、辛くなつたらいつでも言うてね。おねえちゃん、まだまだ元気だから！」

「うん。ありがとう、おねえちゃん」

可愛いなあ、妹がいたらこんなだったのかなあ。おねえちゃんはメロメロです！

私はひとりっ子だったから、彼女のが可愛くてたまらないんだよね。

「かっこつけてるけど、セレンちゃんの方がまだまだ上手にゃん」

「うるさいよ、シルバ」

ほっこりしている私の頭の上から、小さく声が聞こえて私も思わず声を潜めて応じる。

こいつのせいで、すっかりご近所じゃ私のイメージが『黒猫を頭に乗っけている、デリラさんとして世話になってるお嬢ちゃん』である。

シルバなりに配慮しているのか、重さは大して感じないんだけどさ。そこは精霊マジック？

「だって朝もご主人様を起こしに来てくれるし」

「うっ」

「薪の受け渡しだってテキパキしてるし」

「ううっ」

「もう少し大きくなったら店番にも出て、ご主人様の立場なくなっちゃうにゃんよ？」

「う、うう、うるさいな!」

思いつきり凶星だけに思わずシルバを掴んで目の前にぶら下げる。

でもシルバはにやにやしてるんだから腹が立つ!!

そりゃね、こつちでの生活に慣れても体力の面でへとへとになっちゃってぐっすりな私は確かにセレンちゃんに起こしてもらってますけどね!? 朝から可愛い子に起こされて役得とか思ってたませんから! 慣れたらそういうのも減っていくんだから!!

薪の受け渡しだって、つい樵さんたちに声をかけるタイミングを逃してまごついてる間にセレンちゃんが『おはようございますー』ってしてくれるとか、私は出遅れてるけどね!

……大人としての立場が危うい。

ここらで挽回しないと、いつまでもシルバに言われっぱなしなんて悔しすぎる!

「おねえちゃんどうかしたの?」

「あ、ううん。なんでもないよ!」

猫をぶら下げて睨みつける私を心配そうに見上げるセレンちゃんに、慌てて手を振ってなんでもないアピールをしてみせる。

にゃおん、なんてかわいい子ぶった鳴き声を上げるシルバが憎らしい。

いや実際に可愛いからそれが余計に憎らし……いや本当、可愛いな。許せるな。

……後でおなかをモフモフの刑だ、それで許そう！

「シルバが尻尾を顔の前にやるもんだから、くすぐったくってさ」

「悪戯しちゃったのかな？ めっ、だよ。シルバちゃん！」

私の苦しい言い訳に、セレンちゃんが心配そうな表情から笑顔になった。

やっぱり笑顔でしてくれた方が、いいよね。心配かけちゃいけない。

「今日もお昼時は忙しいのかなあ、あたしも手伝えたらいいのに」

「セレンちゃんは普段からたくさんお手伝いしてるんだし、昼間は私が働くから大丈夫だよ」

「おねえちゃんが来てくれて、お母さんすごく助かってるって言ってたよ！」

「えっ、そう？ そうだったら嬉しいなあ」

「本当よ？ 接客が丁寧だって評判なんだから！」

ウエイトレスは学生時代、ファミレスで接客していたから経験あるもんね。

それがまさか異世界で活かされるとは思ってもみなかったけど……とはいえ、いつまでもデリラさんの厚意に甘えたままってわけにはいかない。

「あたしもいつか、お母さんみたいに料理上手になって銀の匙亭を切り盛りするんだ！」

「……セレンちゃんならできるよ」

微笑ましくしてほっこりしたけど、その頃には私も自立できてないと困るね！！

シルバの言葉じゃないけれど、セレンちゃんが成長したら絶対、評判の看板娘になるだろうし。

私は料理も正直得意じゃないからお役御免になる未来しか見えない。

いや、あの二人が私を追い出すなんてしないってわかってるけど！

言い訳をしておくのだ、私は料理ができないわけじゃない。

そこそこは大事なのでしっかり理解してほしい。

単純に『かまど』で『魔法』を使って料理をするっていうことに慣れていないだけで。

私だって社会人で一人暮らし経験者だけじゃ。現代社会の電子機器っていう便利なものが身近なんだからしょうがないじゃない。っていうか、かまどでご飯を炊ける人の方が少数派なんだって。

(だから私が悪いわけじゃないと思うんだ……！)

ちなみに得意料理はカレーです。子どもでも作れるって？ うるさいな、誰が作っても失敗しない料理って最高じゃないの。色々アレンジだってもできちゃう優れモノなんだからな！

(……そうやって考えるとレトルト食品とかって便利だったな)

あともう一品欲しいって時に、特に優れていると思うんだよね。

むしろ忙しくて作る気力もない時とかさ、それこそお手軽便利な救世主っていうか……。

「ご主人様から今、とっても残念な感じをキャッチしたにゃん」

「察しが良すぎてドン引くわ」

「それはこっちのセリフだにゃん」

この口の悪さよ……！ お前は私のサポート役なんじゃないのか！

とはいえ、シルバが言っていることが割と間違っていないから、私も反論しづらい。

セレンちゃんと会話しつつ、そんな風にこっそりシルバともやりとりしていたらあつという間に

銀の匙亭に着いたんだけど、セレンちゃんの顔色がもつと悪くなっている気がした。

(……私に気を遣って、無理してるのかな)

後はもう運んだ薪を並び替えるだけだし、ここは私が頑張るべきでしょ!

「セレンちゃん、ここは私がやっつくから中に入ってデリラさんのこと手伝ってきて? そろそろ朝ご飯目当てのお客さんが来るだろうからね」

「えっ、あたしもやるよ?」

「いいからいいから。セレンちゃんも未来の看板娘として行ってらっしゃい!」

「……ありがと、おねえちゃん」

セレンちゃんは、私の下手な気遣いに申し訳なさそうにぺこっと頭を下げた。戻っていった。

多分、自分でもあまり体調がよくないことはわかっていたんだと思う。本当にいい子だ。

(気にしないでいいのになあ……って言っても無理か)

このくらいしかできないんだから、もつと頼ってくれていいのに。まあ、私にできることは少ないんだけど……っていけないいけない、ネガティブになるところだった。

「さーて、ちゃっちゃんとやっちゃいますか!」

やれることを一つずつ、こつこつと。

異世界生活、やるって決めたんだから頑張らないとね!!

とはいえ……重い。薪が、重い……。

成人女性と十歳の女の子が手提げ袋に入れて運べる分量でしかない薪とはいえ、ここまで運んで来るだけで腕がプルプルしている私にとってこれは重労働以外の何物でもない。

貧弱って言うな、これでも頑張ってるんだからね……!

毎日やっていれば多分、そのうち、きつと慣れてくると思うんだけど。

(おかしいなあ、セレンちゃんに手伝ってもらっているとはいえ、銀の匙亭で暮らし始めてから毎日やっているはずなだけ……!?)

銀の匙亭では薪を大量に買うわけじゃないから台車がない。だから全部手作業。

デリラさん曰く、ちょっとお値段が高くなっているなら薪の配達も頼めるらしいけど、お店の経営状況を考えると自分たちでできることはやるべきだって意見だった。私も賛成だ。

「あと半分……!」

「今日は並び替える薪が多いにゃんねえ」

「ここんとこ天気が悪かったからね。追加の薪が少ないのは助かるけどさ……」

毎日毎日、必要に応じて薪を買う。

けど当然、古い薪から消費するために、それを取り出しやすいように一度出して新しいものと積み替えるわけで。これがまた、結構な重労働なのだ。

「あー、もう……!! こういう時に魔法が使えたら便利なのに……!!」

「そんな都合良い魔法はないにゃー。あ、結構難しいけどゴーステム作るのはどうにゃん?」

「初心者にもできそうなものにしてくれないかな!」

「そうなるかと肉体強化系かじゃあ。まあ、ご主人様の基礎がもうちょっとできたら教えてあげるにゃん。なんだかんだ便利だし覚えておいて損はないにゃん!」

「お願い……!!」

こういう作業って男性が担当することが多いらしいんだけど、デリラさんは生憎と未亡人。美人だから言い寄る男は星の数、だけど亡くなった旦那さんを今も一途いちずに想っているから母娘二人で頑張っているんだって。

それを常連さんから聞いて知っている私としては、そんな二人にできる恩返しの一歩。

(つてわけで、こんなところで薪に負けている場合かって話であつてだな……!!)

かといって、キツイもんはどうやつたつてキツイ。

ぱぱっと便利にどうにかできるならそうしたいつて思うのは人情つてもんだらう。

魔法がそこまで便利なもんじゃないつてことは理解している。結局使う人次第。

私はまだまだ『魔力とはなにか』みたいなところからシルバに習っている状態なので、魔法を使つてどうにか……つてのは今の所、夢のまた夢なんだよね。

魔法がある異世界生活、意外と世知辛いのだ!

「……このままじゃ日が暮れちゃうにゃんよ?」

「なによ、文句あるの? あとちよつとなんだから、大人しく待つてなさいよ」

後方で私の作業を見守っているシルバに、思わずキツイ言い方をしてしまった。

ちよつとイライラしちゃったなと反省しつつ、私は薪を押し上げた。でもこれで最後なんだから、少しくらい待つていてくれたつていいと思う。

あと少し、背伸びをして薪を押し上げたいんだけどこれが届かない。

(ほんのちよつと! ほんのちよつとなんだけど!)

脚立を持つてくれば済むことだけど、あれがまた重いんだよね。

正直、薪運びでくたびれた腕にはキツすぎる重量だから、できればパスしたい。

「こんつのオ……！」

ジャンプしたらいけるだろうか？ いやいや、大人の女がやる所作じゃない。

失敗したら積んだ薪が崩れてしまうかもしれない。多分、そうなる。

そんなことになったら、音を聞きつけてセレンちゃんが来ちゃうかもしれない。

惨状を見たあの子は申し訳なさそうに言うんだ、『一人でやらせてごめんなさい』って。

（私がやるって言ったんだから、やり遂げなくちゃ……！）

意固地になってるっていう自覚は、ある。

この性格が災いして、会社でも負けたくないって無駄に頑張っちゃって余計に辞められなかった。

あの後、充電期間中にそのことについて、いやってほど反省した。そのはずだ。

でも、人間そう簡単には変われないらしい。

「まったく……素直に一言、手伝ってほしいと言えればいいだろう」

背後から声が聞こえたと思うと肩と背中が温もりを感じて思わず手が止まってしまった私の目に、

私の手から離れた薪が落ちるところが見えた。

まるでスローモーションかのような光景を見た次の瞬間、私のものとは違う指が軽々と落ちそう

な薪を押し込む。私はそれを、茫然と見上げるしかできない。

そんな私の耳に、呆れたようなため息が聞こえた。

「……ほら、これでいいんだろ」

慌てて振り返った先にいたのは、黒髪の男性だった。

ひと房だけ、髪の色が銀色で。和服みたいな衣装を身に纏まとった、一言で表すならば——すごく、かっこいい男の人がそこにいるではないか。

首元には、見覚えのあるチョーカーをしていて、まさか、と私は息を呑む。

「だ、誰……って、えっ、そのチョーカー……まさか、あの、もしかして……シルバ？」

「そうだ。まったく見てられないな、自立と意固地になることは違う。そうだろう？」

確認するように彼の名前を呼んだら、鼻で笑われた上に諭すような台詞を吐かれ、私は感謝の言葉をぐっと飲み込んだ。

意固地な自分を見透かされたようで、ちよつと悔しかったからだ。

「人の姿になれるなんて、聞いてない！」

「言っけないからな」

「なんで……」

「お前は猫が好きなんだろう？ それともこちらの姿がいいなら、常にそうしていようか？」  
にやりと笑った姿がカッコイイ。って違うそうじゃない！

なにそれ、私のためならなんでもするってか？

いや、確かに猫は好きだし猫型のシルバは私の理想通り。つまり、シルバは私の好みの姿を象かたどっている……ということは、当然のように人型も、その、アレだ。

要するに、今日の前にいる人型のシルバも、すごい私の理想通りすぎて、ヤバイ。

ヤバイの一言に尽きる。

しかも密着しているような距離感でいるんだもの、顔が赤くなつたって仕方がないと思わない？

そんな私を見てシルバが笑うもんだから、ついカチンときて頭を撫でようとしてきたその手を払いのけてやった。

「猫の姿で結構よ！」

「はいはい。まったく甘えるのが下手だよな、おれのご主人様は」

「なによ……っ！」

ムカついて文句を言おうとした瞬間、そこには地面に座って顔を洗う仕草をみせる黒猫が一匹。

したり顔で可愛らしく「にゃあん」とひと鳴きするとかもう本当に！ 本当に！ なんてあざといやつなんだ……!!

そんなに可愛くされたら私が文句言えないってわかってて、この仕草ですよ。

なんて小悪魔的な、いやそれがいい。じゃなくて！

「シルバ、あんたねえっ……」

「お店が賑やかになってきたにゃん。そろそろ戻らないとセレンちゃん一人じゃ大変にゃんよ？」

「……後で覚えてなさい！」

「もう忘れたにゃん、ほらほらさっさと行くにゃん」

再び私の頭の上に乗ったシルバは尻尾をパタパタさせてもう動く気はないらしい。

可愛いから許すけど、いつまでもその可愛さで許されると思うなよ……? ?

まあそれを口にしたところで口で勝てる気がないので、今の所は大人しくしておくけど！

独り立ちするだけの知識と経験を得たら覚えとけ！

いつか美味しいご飯作って、ぎゃふんと言わせてやるからな!!

「シルバ」

「なんだにゃん？」

「……さっきはありがとう」

それでも、お礼を言わないのは人として間違っている。ぶつきらぼうに小さく感謝の言葉を述べると、頭の上でシルバが機嫌よく尻尾を揺らした。

私が薪の整頓を終えて手を洗いキッチンに向かうと、デリラさんとセレンちゃんの姿が見えた。お皿を複数並べているところを見ると、ちょうど注文が入ったのかもしれない。

「戻りました、遅れてすみません」

「おかえり、スバルちゃん。薪を全部やってくれたんだって？ ありがとうね」

スープ鍋をかき混ぜながらにっこり笑ったデリラさんが、手際よくサラダとパンにハムエッグ、アツアツのスープをトレイに載せてセットを完成させる。美味しくて安い人気の朝食セットだ。

「戻って来たばかりで悪いんだけどね、これ持ってつてくれるかい」

「あ、はい。わかりました」

「お母さん、あたしがやるよ！」

デリラさんにトレイを示されて持つていこうとすると、セレンちゃんが慌てたように声を上げた。お手伝いしたい年頃なのと、私に対して申し訳ないという気持ちなのかなって思った。

デリラさんもびっくりしていたけれど、すぐに「お母さん」の顔でつん、とセレンちゃんの鼻頭をつついてにっこり笑う。

「いいから、セレンはちゃっちゃと自分の朝ご飯食べちゃって」

「……はあい……」

しょんぼりとするセレンちゃんは可愛いけど、なんだかこっちの罪悪感がすごかった。

お手伝いしたいのに私が横取りしたみたいになっちゃった、そんな気分だ。

勿論そんなことはないし、セレンちゃんだってわかってくれているけど……オロオロする私に、デリラさんはセレンちゃんの頭を撫でながらそつとウインクしてきた。

「食べ終わったらスバルちゃんと交代してあげてちょうだい。ね？」

「……！！ うん！！」

ぱつと不満そうな顔を変えたセレンちゃんが、二階の部屋へ朝ご飯を持って駆け上がる。ほっこりした気持ちでそれを見送った。

多分、セレンちゃんが食べ終わる頃には朝食に来ているお客さんが落ち着くことを見越してのことなんだらうな。ほんと、デリラさんすごいなあ。

私も仕事をしなくてはとトレイを持って客席に向かう。

銀の匙亭は、ちよつと大きめの一軒家の一階がそのまま食堂になっていて、基本的に食事のみでお酒はあまり置いていない。安心して食事を楽しめる場所として評判のお店だ。

リーズナブルかつポリウムがある料理を出すことで、酒場との差別化を図っているらしい。

「はい、朝食セットお待たせしました！」

トレイにはテーブルの番号が書いてあって、どこに届けるのか一目瞭然。

ふふん！ これ、実は私の提案なのだ！

どのテーブルでなにを注文されたのかわからなくなったりするのが減るっていうのは、客にとっても店にとっても良いことだからね!

セレンちゃんがお手伝いしてくれている時もその番号を見てもらえばいいわけだし。

忙しい時はこういう何気ないのが助かるってもんなのよ……酒場じゃないから酔っ払いもほほいなどとはいえ、クレーマーはいつ現れるかわかったもんじゃないし。

私ならまだしも、対応に出たのがセレンちゃんだったらと思うと心配じゃない!!

(まあ、今んとこそんなクレーマーなんていないけど)

町の人たちは基本的に穏やかな人が多くて、互いに助け合おうのが当たり前って感じだからかな。

あのブラック会社で始発出勤終電帰宅が当たり前、なんなら泊まり込みして、それでも上司にもっと仕事しろって怒鳴られたり先輩にいびられたり仕事押しつけられたりパシラされた散々な日々を思うと、ここの人たちって天使かな? って密かに思ってるんだよね。

毎日こっそり揉んでるのは内緒だ。

うっ、思い出すとココとの落差に涙が出そう。

「お、スバルじゃん! おはよーさん。今日の朝食セットもうまそーだなあ!」

「うまそーじゃなくて美味しいの! おはよう、レニウム。これから仕事?」

「おうよ、腹が減ってちゃ仕事になんねーからな!」

朝食セットを注文したのは、馴染みの人だった。

グレーがかつたちよつと癖のある髪と八重歯がやんちゃっぽい雰囲気を持っている彼の名前はレニウム。右目の下にあるほくろがチャームポイントだと思う。なんと職業は『冒険者』。

明るく人懐っこいタイプで、今じゃ私もすっかり打ち解けて友達関係だ。

「あのクツソ生意気な猫は？」

「シルバならあっちのカウンターで寝てるよ」

「おー、そっか。お前も朝から働いてて偉いな！ なんなら頭撫でてやろうか？」

「結構ですう〜」

そのうち一流の冒険者になるんだぞって胸を張って言ってるけど、毎回シルバを撫でようとしては引つ掻かれてるんだよなあ……。私のこともよく撫でてくるんだけど、そういうことしてると好意があるのかなって勘違いしちゃう子が出るから気をつけなよ？ この無自覚ワンコ系め！

セレンちゃんも懐いてるし、親切だし、文句なしのイケメンの部類だけど……ただ一つ、本人のせいではない難点がある。

そのせいで彼は私にとって危険人物でもあるのだ。

接し方には細心の注意を払わないといけない。……まあ普通に会話しているだけなら問題ない。

「聞いて驚け、今日の依頼はモンスター退治なんだぜ。今まで採取依頼ばっかだったけど、とうとうおれっちの時代がやってきた！」

「あ、そうなの？」

「おれっちの活躍が明日はきつと町中を駆け巡るぜ！」

にっかりと笑ったこのレニウムの発言の直後、**世界が止まる。**

そしてレニウム以外がモノクロになったように見えたかと思うと、笑顔のまま止まった彼の前にウインドウが現れた。

そう、これが私の能力——【桃色はっぴー☆天国】<sup>パラダイス</sup>。

発動条件はランダム、こうして私を含め世界中が動きを止める。そしてゲームみたいな選択肢が出てくるので、その中から選ばないといけない。それが私の能力だ。

意味不明な能力である。いや意味はわかる。選択肢次第で、上手に立ち回れるってことでしょ？でもなんでゲームみたいにした？ その必要あった？ そう問い詰めた。

胡散臭いかミサマの『サービスだよ☆』って笑顔が頭にちらついてイラッとした。

(なにになに……)

ちなみにこの選択が割と重要で、選ぶ時は慎重にならざるを得ない。

何故なら、これには即死回避がついているのだ！ 基本的にランダム発生なので人間関係ほか諸々は結局のところ、普段の行いが大事だった話。

出てきたウィンドウには、先ほどのレニウムの発言がセリフとして表示されている。

それに対して少しだけ被るように別ウィンドウとして選択肢が出ている状態。

選択肢、一つ目…『どつか、じゃあ楽しみにかけてるね！』

そのセリフの横に赤矢印があって、それが上を向いているから好感度アップ系だと思っている。

選択肢、二つ目…『ぶーん、まあ気をつけて行ってらっしゃい！』

特に矢印もなにもない、無難な答えてことかな。可もなく不可もなくってやつ。

選択肢、三つ目…『知らないよ、早く食べて出てってくれよ！』

そこまで言わなくてもいいと思うんだけど。塩対応すぎない!?



・レニウム・

おれっちの活躍が明日はきっと町中を  
駆け巡るぜ!

◦ 選択 ◦

✦ そっか、じゃあ楽しみにしてるね! ↑

ふーん、まあ気をつけて行ってらっしゃい!

知らないよ、早く食べて出てってくれる? ☠

……そして、横にドクロマークがある。これが死亡フラグ。いや待ってこれが良くない選択肢なのは見てわかるけど、これでなんで死亡フラグ立つの!?

(ホントこの世界、平和に見えてスリリングすぎなんですけど……!)

私はこのスキルに関して、いつも無難な答えを選ぶことにしている。

なんでかって? 今は生活優先だから、好感度が上がって恋愛に発展しても困るし。

それに、もし戻る方法が見つかったら……未練ができちゃうのは、……うん、困るかな。

なにより、スキルで恋愛成就するってちよつと……ほら……ねえ?

「『ふーん、まあ気をつけて行つてらっしゃい!』」

選んだ答え通りに私の口が勝手に動く。

その瞬間、モノクロだった世界は再び色づいて、出ていたウィンドウもいつの間にか消えている。

……初めの頃は戸惑ったこのスキルも、今じゃそれなりに見慣れて動揺はしなくなった。

こんな感じで最初にデリラさんたちに出会った時も、唐突に出てきた挙げ句に『異世界から来たんです』を選択したら即死だったんで『記憶喪失なんです』を選ぶ以外なかったんだけどね……。

結果論だけど、おかげで銀の匙亭で働いているんだから悪いスキルじゃない。だけど、初めてそれを見た私の気持ちも考えてほしい。びっくりするでしょ……? ?

(あの時は硬直した私にシルバが色々レクチャーしてくれて、シルバはスキルの影響を受けないから私は一人ぼっちってわけでもないんだなって奇妙な安心感を覚えたっけ)

ちなみにこのスキル、唐突に出てくるので本当に心臓が悪い。昨日は外に出た時にいた馬を見て発動した挙げ句に『撫でる』『叩く』『無視する』と、ろくでもない選択肢が出てきた。

馬相手だからか好感度も死亡フラゲもなにもなかったんだけど……どうなってんだホント。クレーン案件なのに、肝心のカミサマに連絡がつかないんだから困っちゃうよね！

ただまあ、こういうのが時々あるんだからそりゃ慣れもするってもんである。

そんな私の気持ちとはかく、レニウムは私の返答に不満足だったらしい。

「おつまえなあ！ そこは『頑張ってるね』って可愛く言うところじゃねーの？ そんなんじゃ嫁の貰い手なくなっちゃうぞ」

「いや別に応援されたからってやることは変わらないでしょ？ それに嫁の貰い手ってアンタにそんなこと心配されたくありません！」

「はっはー、まあ貰い手に困ったらおれっちが貰ってやろうか。スバルが相手だったら毎日楽しそうだし！ おれっち強いし生活力もあるからお買い得だぜ？」

「遠慮しとく。私、今は自分のことで手一杯なんだよね」

「ちえっ」

ひらりと手を振って、キッチンの方へと戻る。店員とお客さんの距離感バッチリ。さすが私。

まったく、なんだかんだ顔がいいから困っちゃうよね。一瞬ドキッとしちゃった。

ちらっと肩越しにレニウムを振り返ったけど、不満そうに唇を尖らせているだけだ。

でも向かいに座った人物を見て、すぐに笑顔を見せた。その人物を見た私は思わず苦い表情になっちゃって、慌てて体ごと視線を背ける。

レニウムの向かいに座ったその人が悪いわけじゃない。わかってるんだけど……。

でも、その人もこの能力が最近やけに発動する相手の一人なのだ。

レニウムと、他にあと二人。この三人は要注意人物なのだ!!

(最近、彼らと出会うたびに【桃色はっぴー☆天国】<sup>パラダイス</sup>が発生しては好感度アップの表示が出て  
るんだよなあ。好感度が死かかってなんだその究極の選択!!)

彼らはこの店の常連で、年齢が私と近い異性ばかり。意図的なものを感じざるを得ない。

思わずシルバの方へと視線を向けると「なにか?」と言わんばかりの視線を返された。

きゆるつとした目で見上げるんじゃない。可愛いじゃないか!

「ちよつとシルバ、この能力……ランダム発生なのはまだ理解できるけど、意図的に誰かと恋愛関係にさせようとしてない?」

「考えすぎだと思っくけどにゃあ。でももしそうなら、粋な計らいってやつじゃないのかにゃん?」

「そんなん要らないし!」

「カミサマがそつちの世界の雑誌読んで『恋愛は人生の潤い!』って叫んでたにゃん」

しれつと知りたくない情報を教えてくれたシルバがくあつとあくびをする。

多分だけど、どうでもいいと思ってるな、コレ。

周囲の目にはこのやりとりもまた構ってゐるなくらいに思われているのが救いだ。思わずため息をついたところで、ひらりと手を振られるのが見えた。

注文ならば仕方がないと私が笑顔を作つてそちらに向かえば、レニウムが先程の朝食をがつついで食べている。そして、向かい側に座る人物はそれを呆れた顔で見ながら注意していた。

「レニウム、少しは行儀よくしないか」

「だつてよー、兄貴はお上品すぎるんだつて! 腹が減つてんだからしよーがねえじゃん!!」

「だったら家で食べたらどうだ？」

「銀の匙亭で朝食セットの大盛りを食うのがいいんだって！」

レニウムの発言に、その人は私を見上げてやれやれと肩を竦めながら微笑んだ。

兄貴、そうレニウムが呼んだその人は正真正銘、レニウムのお兄さんだ。

「弟が毎回騒がしくてすまないね」

「いえ、大丈夫です」

彼の名前はアウラムさん。落ち着いた雰囲気を持った男性で、冒険者ではないらしい。

まあ、物腰柔らかな人で荒事には向かなそうだし、むしろ服装的にお金持ちの実業家って言われ  
たらなるほどって感じがする印象の人だ。

柔らかな金髪に緑の瞳、左目の下にはほくろがあつてこれがまた色気抜群。整った顔立ちと相  
俟って微笑む姿は大変眼福で、直視した人は性別問わず恋に落ちるんじゃないかってレベル。

レニウムと仲良くしているおかげか、私にもよく話しかけてくれる。顔面偏差値が高い上に紳士  
とか、今までどれだけの女性の心を盗んできたんだろうこの人……なんて思ったのは秘密だ。

「ご注文はお決まりですか？」

「コーヒーをブラックで」

微笑むアウラムさんを前に、またしても世界が止まった。

出てきた選択肢に思わず頭を抱えなくなった。私も動けないけど。

選択肢、一つ目…『ええー!?』『コーヒーだけですか?』『しみつたれてるなあ!』

朝から喧嘩の大安売りですかね。好感度が下がる下向きの青矢印がついているのは理解できるけど、ドクロマークまでついてるってひどくない!?

こういう場合は好感度が下がった対応をされた挙げ句にその後、なにかトラブルでもあるんじゃないかってシルバが言っていた。二段構えでヤバイってことですかそうですか。

選択肢、二つ目…『かしこまりました。ノー一緒にポテトはいかがですか?』

どこのジャンクフード店だ。いやフライドポテトはあるけど、朝の時間帯に扱ってないからね!?! デリラさんの作る皮付きフライドポテトはセレンちゃんと私のおやつだから譲りません。

…しかし何故この選択肢でドクロマークがついているのか、解せぬ。

選択肢、三つ目…『コーヒーですね、かしこまりました』

好感度が上がっちゃうけど、これを選ぶ以外に選択肢がない。

いや選択肢はあるけど死亡フラグはご遠慮願いたいでしょ、普通に!!

(なんでアウラムさんの選択肢はこう、死亡フラグが多いんだろう…)

最初の頃は右往左往していたこのスキルだけど、最近では冷静に分析する余裕も出てきた。

一日に何回も出てくる日もあれば、まるで出てこない日もある。どの選択肢を選んでも変化がなさそうなものだったり、逆に死亡フラグが多めだったりと本当に読めない。

役に立ってるかって聞かれれば、まあ死亡フラグ回避ができているんだからありがたいっちゃありがたいけど…いや待て、日常生活にこんな死亡フラグ転がってるんだっていう素朴な疑問を抱いては…だめだ、考えたら負けな気がする。

「コーヒーですね、かしこまりました」

「うん、ありがとう」

アウラムさんを悪く言うつもりはないけど、死亡フラグの多さと、レニウムがこの店にいる時にだけ現れることを考えると、弟が見知らぬ女と親しくしていることが心配っていうプラコン疑惑。

……こういうのがあるからできる限り好感度は上げずに生きていきたいんだよね!!

(誰かと恋人関係になったら、ある意味落ち着くのかな? いやいやそんなスキル頼みの打算的な恋なんていやだし。そもそも私は帰るんだから、未練を自ら作ってどうする!)

コーヒーを淹れるくらいは私にだってできるので、カップとソーサーを準備する。

元居た世界のような全自動のコーヒーメーカーではないから、ちょっと不安はまだあるけど……何事も経験なのだ! 手動だからって、要は集中してやればいいだけの話。

きつと私は必死な顔でコーヒーを淹れていたに違いないが、気にしてはいけない。

……気にしてはいけない。

コーヒーを無事淹れ終えたことで達成感を覚えた私が思わず小さくガッツポーズをとると、くすくす笑う声が背後から聞こえてきた。

見られていたのかと慌てて振り向くと、そこには穏やかな笑みを浮かべた男性の姿があった。

「おはようございます、スバルさん」

「ニオブ先生! おはようございます」

「うん、今日も元気そうだね。セレンちゃんはいるかかな?」

「はい、今は二階で朝ご飯を食べてます」

「そう。デリラさんは？ 忙しいかな？」

「大丈夫だと思えます。先生が来たって伝えてきますね！」

「ありがとう。診察が終わったらばくも朝食セットをもらってもいいかな」

穏やかに話すこの人は、お医者さんのニオブさん。

セレンちゃんの主治医でもあって、こうしてちよくちよく様子を見に来てくれる優しい人。黒髪を無造作に後ろで束ねている辺り、あまり身嗜みにはこだわりがなさそうだけど……それが似合っちゃう、切れ長な目が印象的な理知的な美形。

そして、この人もまた【桃色はっぴー☆天国】<sup>パラダイス</sup>が反応しやすい人の一人なのだ！！

選択肢、一つ目…『勿論です、こつせりサービスでデザートもつけちゃいますね！』

……文句なしに好感度アップですね、わかります。

いやいや勝手にデザートとかサービスできないからね!? クッキーくらいならなんとか……。

選択肢、二つ目…『ためですよ、もうそろそろ朝食セットの時間はおしまいです！』

不思議なことにこれでドクロマークついてるんだよね。

選択しないからいいんだけど。そもそも朝食セットまだあるはずだし。でもなんでだ……？

選択肢、三つ目…『勿論です。セレンちゃんのこと、これからもよろしくお願ひします』

これだ！ なにもマークがついてない！！

会話一つに実はこうやって頭を使っているだなんて、誰がわかってくれるだろう……。

シナリオがある人生でもないのに、毎回とは言わないけどこうやって選択を迫られる人生って便利なのか窮屈なのか。

「『勿論です。セレンちゃんのこと、これからもよろしくお願いします』」

「ぼくでお役に立てるなら、喜んで」

はー、異世界生活ってのはなかなか大変……って、いや、主にこのスキルのせいなのかなあ……。こっそりため息をつく私に近寄って来たシルバが、こてんと首を傾げる。

「主にご主人様が真面目すぎるせいだと思うけどにゃん」

「うるさいよ、シルバ」

誰も見ていないのいいことに暢気のんきなことを言ってくるからその頭をがしがし撫でてやった。

ニャア、と抗議の鳴き声が聞こえたけれど、知りません！

ああ、良い手触りだった!!



「あー、今日も一日良く働いたあー！」

「お疲れ様にゃん」

ほふんとベッドにダイブする。行儀が悪いと言わんばかりのシルバの目線は気にしない。

一日労働して疲れている人間だもの、このくらい許されたっていいと思うの！

異世界こでの生活はとても健康的だと思う。

朝は早くから起きて、働いてデリラさんの美味しくて栄養バランスの取れた食事をとって、働いて食べて、働いて食べて寝る。その繰り返し。

元の世界でブラック会社に勤めていた時に比べると、本当に天地の差な生き方なのだ！

……会社から解放された後は自堕落生活だったから、やっぱりそっちとも天地の差だな……。思わず遠い目をしたくなるけど、そこは考えないことにしよう。

「常識を覚えて、魔法を覚えて、その後のこと、かあ……」

「どうかしたにゃん？」

「うん、帰る方法を見つかるまで異世界で生きて行こうって決めて、今の所はなんとかやってると思うんだよね。だけど、このままじゃだめなんじゃないかなって思ってる」

「……ご主人様は、頑張りすぎなくらいだからもう少し人生を楽しんだらどうにゃん……?」

「そうかなあ」

シルバの言葉に首を傾げる。

だって、ぐっすり眠れて、優しい人たちに囲まれて、私は恵まれていると思うんだ。

恵まれている分、それに見合ったお返しをしたい。

でも、今の私にできることっていったら、『とにかく頑張る』くらいしかない。

だから朝はできる限りお店の前の通りや店内を掃除して、食器をチェックして……そういうやデリラさんにも働きすぎだって注意されたっけ。私は感覚がずれているんだらうか。

「頑張ることは、悪いことじゃないにゃん。でも、頑張りすぎたら周りが心配するにゃん」

「それは、……そうかもしれないけど」

魔法が使えない、それは別に悪いことじゃない。

記憶喪失だつてことになっているし、魔法を使うのが上手い人ばかりじゃない。なんなら加減が苦手だからと使わない人だつていることを、最近の私はちゃんと学んで知つている。

でも、だからといって手に職があるわけじゃない私になにができる？

お世話になりっぱなしで、決して余裕があるわけじゃないデリラさんたちの生活に負担をかけているのは目に見えてわかつていて、それを仕方がないつて知らないふりもできない。

「……早く手に職を持てるくらいになつて、独り立ちしなくっちゃ」

デリラさんは優しく、大人だから……セレンちゃんや私になにも言わない。

だけど、私だつて馬鹿じゃないし、れっき歴とした大人だ。状況くらい理解している。

冒険者だつた旦那さんを事故で亡くしてから、女手一つでこの食堂とセレンちゃんを守つてきたデリラさんのこと。

セレンちゃんの体が弱いこともあつて、薬代とか診療費が馬鹿にならないこと。

ニオブ先生が気を遣つて、ツケ払いとかにしてくれているらしいけど……そのやりくりは、正直とても大変だつてこと。

そして、具合が悪いセレンちゃんのために、今まで何度もお店を休んだことがあること。

私に来てからはまだないけど、これからもそういう休みはあるだろうつて。

町の人たちのほとんどが親切だから、この母娘を応援している。

デリラさんもセレンちゃんも、それを申し訳なく思つていうのも聞いたから。

ご近所さんが『二人のこと支えてあげてね』つてこつそり教えてくれたこれらの話は、とても大

切なことだと思う。

(私は、できることを、探さなくちゃいけない)

今はまだ、ウェイトレスをするくらいしかできないけど……ちゃんと色々学んで、料理とかもある程度デリラさんに習ったりして、代わりができるくらいにならなければ。

そうじゃなきゃ、私はただの厄介者になってしまう。

デリラさんも、セレンちゃんも、優しいから決してそんなことは言わない。

言わないからこそ、私はその優しさと信頼に応えなくてはいけないんだ。

「……ご主人様」

はあ、とため息が聞こえてはっとした。

ベッドに腰かける私の手にすり寄る、柔らかくて温かい存在に思わず目を瞠みはる。

「ど、どうしたのシルバ……珍しい」

普段は私が抱っこさせるとかモフモフさせるとか言うのと嫌そうな顔をしてダンスやクローゼットの上とか、私の手の届かないところに逃げちゃうの。

「怖い顔をしてあんまり気負いすぎると、見えるものも見えなくなっちゃうにゃん」

「……怖い顔してた？」

「どうせ、できることを見つけて完璧にこなさなきゃとかそんなこと考えてたにゃんね。そんなの無理だって、認めるところから始めたらどうにゃん」

「ひどくない!？」

いや、できることを見つけなきゃとは思ったけど……完璧にこなしたいとかは考えてない!

抗議の声を上げる私をまるっと無視して、シルバは私の膝の上で喉を鳴らした。

「この世界に来てまだそんなに経っていないのに、ご主人様はよくやってるにゃん。変に身構えるでもなく、お世話になってる人に恩返ししようと頑張っている姿があるからご近所さんだって認めてくれて、事情を聞かせてくれたにゃんよ？」

「そ、かな……」

「期待に応えたいってご主人様の気持ち、ボクもわからないってわけじゃないにゃん」

「うん……」

「でも、それは今すぐじゃなかったっていいんじゃないかなって思うにゃん」

スバルちゃん、そう呼んで受け入れてくれる町の人たち。

異世界に放り込まれて、その意味もよくわからないまま好きに生きろなんて言われて、納得できずがない。でも、できてはいないなりに、なんとかやっついていかなくちやとは思っている。

「ご主人様、前にも説明したけどこの世界で生きる間はあっちでの時間経過はほんの僅か——それこそ、夢を見ているのと同じ。一瞬の出来事にゃん」

「……うん」

「だから、焦らずこの世界を生きればいいにゃん」

シルバによれば【一夜の夢システム】とかいう、まるでゲームのシステムみたいなネーミングの力で、ここでどんな一生を送ろうと、元の世界に戻ったら一瞬の夢になるらしい。

不思議な夢を見たな、その程度で終わってしまうようになってるんだって。

それが本当なら、なにをしてもいいって、罪悪感がなくなる人もいるんだろう。

でも私はそんな風に思えなかった。今もそうだ。

死んだらゲームオーバーで、元の世界でオハヨウゴザイマス。

私はそれをまだ信じていないし、信じ切れないし、そんな無責任な生き方は選べない。

だからこそ、堅実に生きて、お世話になった人にはちゃんと恩返しもして、立つ鳥跡を濁さずよろしく、それから元の世界に戻りたい。

でも同時にそうやって堅実に生きれば生きるほど、お世話になった人や親切にしてくれた人が現れて私の中で未練になっていくんじゃないかっていう不安もある。

(……中途半端だなあ、私)

こんなんだから、会社勤めの時も押しつけられた仕事とかを最後まで責任もってやった挙げ句に手柄は横取りされて、不満を言ったら横っ面張っ倒されて……弱音を言うのも、助けを求めるのも怒られるって思っって怖くなって全部自分でやんなきゃって思っうようになって。

結局できてなかったから、社会復帰がすぐできず自宅療養になった。

大人なんだからしつかりしなきゃ。そう思えば思っうほど、理想と現実はかけ離れていっって、私としてはできることが見当たらなくて、途方に暮れてばっかりだった。

そこを自覚しているから、余計に焦りがあるんだと思っう。

「ご主人様、まだ生活を始めたばかりでなあんにもできなくて当たり前前じゃん」

「そんなんでいいのかなあ」

「普通にゃん」

「そうかなあ」

「じゃなきやボクのいる意味が無くなっちゃうにゃん」

シルバは、私が途方に暮れていることを理解してくれてるんだろう。柔らかな毛並みが、私のこととを慰めるように、励ますようにすり寄せられるとなんだか心がほわっとする。

「ご主人様、頑張るのは悪いことじゃないにゃん。でもご主人様が無理をすれば、デリラさんもセレンちゃんも悲しむにゃんよ？」

「……うん」

「慣れない環境なのに、ご主人様はちゃんとやれてるにゃん」

「……うん」

「どんなに不安でも、ボクがいるにゃん」

「うん」

私が欲しい言葉ばかりするする紡ぐシルバは、なんとなくずるいなあと思う。

頑張っているよ。

ちゃんとできているよ。

傍そばにいるよ。

どれもこれも、社会人になってから欲しても欲しても、なかなか得られなかったものだ。

それが悔しくって勝ち取ってみせるんだ！ って無理をして、結局家族に心配をかけたんだよね。

後で考えてみたら、就職して一人前になったんだから親を頼ったり相談したりするのは恥ずかしい。そんなちっほけなプライドに縋りついた結果、私はポロポロになったわけ。

偶然、状況が好転したからあそこから抜け出せただけ。……ああ、情けなくて涙が出そう。

泣きそうになるのをぐっと堪こらえて、シルバを持ち上げた。

ぐえって声が聞こえた気がするけど、そこは都合よく聞こえないふりをしてぎゅっと抱きしめる。ふかふかで、もふもふで、温かい。生き物の温もりだ。

しょうがないにやあって小さな声がして、大人しくしてくれるシルバは私よりもよっぽど大人なんだろうなって思う。

精霊だからそもそも私よりずーっと大人なんだろうけどね、多分。

「……明日はさ、セレンちゃんと一緒にウエイトレスやろうかな」

「それもいいにゃんね」

「レニウムは依頼を成功させるかな」

「どうでもいいにゃん、アイツ撫で方下手だから嫌いにゃん」

「……そこは許してあげなよ」

「絶対無理」

くすくす笑って頬擦りすれば嫌そうに鳴く低い声が聞こえて、これ以上は甘えさせてもらえないんだなと理解する。

「そうだね、ちよっと気負いすぎたかも」

「ご主人様は、ちよおっと無理しすぎにゃん」

「うん」

「大人だって、できないことはできないって言っているにゃん。そこからどうするかを考えるのがちゃんとした大人にゃん」

「はい」

「返事はしゃっきり短くにゃん！」

「はい！」

「よろしいにゃあん」

「にゃあんはいいんだ!？」

一人じゃなくて、良かった。一人ぼっちは、辛いから。

シルバがいてくれて良かったと最近はず直に思えるようになった。

まだ本人に直接、感謝の言葉を伝えることはできそうにないけどね！

この理不尽な異世界召喚に物申したいことはいくらでもあるので、召喚された時以来接触のないカミサマとやらをぶん殴りたい気持ちは大切に、それはもう大切にとっておこうと思う。

でも、ここでの生活はきつと私になにかを教えてくれる。そんな気がする。

だって、この世界に来た時より、私は前向きな自分に戻れた気がするから。

それに、ウジウジしているのはやっぱり私の性に合わない。

「ねえシルバ、今日は寝落ちしないからまた魔法を教えてよ」

「ええー本当かにゃん？」

「大丈夫だって」

「明日の朝は起こさないにゃんよ？」

「えっ、それは困るかな」

「独り立ちの第一歩は、朝一人で起きるところからにゃん」

するりと私の腕から逃げ出したシルバが悪戯っぽく尻尾を揺らしながら、私の横に座ってぼさぼさになった毛並みを整え始める。

ブラッシングしてあげたくなっただけど叱られそうなので、私は大人しく彼の言葉の続きを待った。「ご主人様が独り立ちできるまでの計画を考えてみたんだにゃん」

「……計画ウ？ え、なにそれちよつと待って」

「待たないにゃん。まず常識はだいぶ覚えたから次は魔法だけど、これは一朝一夕にはいかないので長い目で見るとして……次はご近所づきあい。行動範囲を広げてみるのはどうにゃん？」

尻尾をゆらゆらさせながら、シルバが挙げていくその内容に私は相槌を打つしかできない。

そんな私をよそに、シルバは言い切った後どや顔で私を見ていた。

「名付けて、独り立ち計画にゃん！」

「いやダツサ！」

いやいや、独り立ち計画って。ネーミング安直すぎるでしょ。ダサいでしょ。

さてはシルバ……あんまりセンスないな……？ カミサマのこと言えないレベルだよな。

「今、余計なことを考えなかつたにゃん？」

「いやいやそんなことナイヨ!? シルバの意見はためになるなあって思っただけダヨ!?」

「妙にイントネーションがおかしいにゃんね……まあいいにゃん。とにかくご近所づきあいをしてご主人様がここから出て暮らせる家を探すにゃん」

なるほど、と思わず納得してしまった。いやなんで私も気がつかなくつたんだろう。

勿論、手に職をつていうのは大事だと思う。だけど住居問題も重要だよな。

今はデリラさんのおかげで住み込みで働いているみたいになってるけど、この家から出て自炊生活ができればその分デリラさんたち母娘の負担が減るってことでもあるのだ。

別の住居になってもこの店に通うことは可能なわけで、そうなる私と一人暮らしで暮らせるって印象を与えておかなければ、空き家があったとしても貸してもらえないと思えない。

今までは焦りから漠然としていたビジョンが、一気に現実的になった！

「ウエイトレスを当面はさせてもらってそれを生活費に……となると、やっぱり切り詰めた生活が必要だから自炊が必須にゃん。ご主人様の魔法理解と家事レベル向上が急務にゃん」

「うっ、そこまで言う……?」

現実的な話になると今度は別の現実も突きつけられるという世知辛さ。

私の現状での魔法の扱いはまだ幼児並み。

成功率は正直五分五分ってところで努力あるのみってな感じ。生活に使えるレベルかって問われると難しいけど、弱音を吐いている場合でもない。

「わかった、頑張る……!!」

「その意気にゃん。基礎の魔法が使いこなせたらその先が見えてくるから、ご主人様の適性はボクがちゃんと見定めてあげるにゃん。そこから次を考えるってことでどうにゃん?」

「おおお、シルバがサポート役らしいことをしてるウ……!!」

「もともとボクはサポート役にゃんね? ご主人様は物忘れが激しいみたいだから一度じっくり物事を説明した方がいいにゃん?」

「アッ、スママセンデシタ」

ジト目で見上げてくるハイライトのない赤い目が怖かったので思わず謝ってしまった。

いやだってあれはちよつとヤバイ気配がしたんだって。うん……。

「やれることは、そのうち見つかるとやん。それを見つげるための努力をご主人様はちゃんとして  
いるんだし、サポート役のボクが言うんだから間違いないにやん」

「シルバ……」

シルバの自信満々な言葉に思わず呆れちゃうんだけど、その信頼感が半端ない。

ちよつとだけ、異世界生活に光明が見えた気がする。

(……やれることは、そのうち見つかるとやん……)

その言葉は私の心にストンと落ちた気がする。

そうだよ、私はいつだって頑張つてやってきた。

元の世界だろうと、異世界だろうとそこは変わらない。

「シルバ、私、頑張るからね！」

私がガッツポーズを作つて言えば、シルバが嬉しそうにやあんと、つて笑つてくれたのだった。



## 幕間 シルバは、それを知らない

シルバは人間を知っている。

今まで目の前で観察する機会も興味もなかったから、ただ知識として『知っていた』だけである。



人間は夜に寝て、朝になると起きる。例外もあるが、大抵は昼行性の生き物である。

食事をとらないと死んでしまうし、眠らなくても死んでしまう。

そんな知識を思い出しながら、ちらりと視線だけを向ける。

(幸せそうな顔して寝てるな)

「シルバあ……ふふ、ふわふわあ……」

その視線の先で、むにやむにやとだらしない寝顔で自分の毛並みに優しく触れる女がいる。

シルバはそんな女の顔を見てため息を零しながらも、起こさぬようじっとしていた。

眠ろうと思えば眠れるシルバであったが、それでもこう寝ぼけて撫でまわされた状態でのんびり眠れるほど図太くはない。

猫の姿をしていたところで猫ではないというのに、この異世界から召喚されてしまった娘は理解できていないのか、それともただ図太いだけなのか。

『有栖川昴』という人間のサポートにつくことになったシルバとしては、毎日が驚きの連続だ。

彼が知る「人間」は寿命が短く、男女性があり、子を産み育て、大きな群れを作り発展を続けている種族だ。大抵の人間は脆く、ちよつとしたことが起きれば息絶えてしまうか弱さがある分、群れでそれをカバーしているのだろうと彼は分析している。

その考えは、あながち間違いはなかったと思う。

昴と共に過ごすようになり、彼女だけでなく多くの人間が猫の姿であるシルバに触れる。

その柔らかさと温かさは、彼の知らないものだった。

(それにしたって触れすぎだろう……)

姿かたちは、あくまで仮初のものだ。本来のシルバにはこれといった形はない。

そのことは昂に伝えてあるし、彼女も理解したはずだ。

しかしおかしなことに、彼女はこうして毛並みに触れたがる。

シルバは彼女のためだけに存在する立場なので、好きにすればいいと思っている。特になにか思うことはないし、ぼうっとしていればいいだけなのだ。ただ少し、くすぐったい。

(無防備だな)

彼女の護衛も兼ねているのだから異性が適しているだろうとこの世界を司る、いわゆる『神』という存在にそう言いつけられて、シルバは男性体となった。

その時は彼も、か弱く特別な能力も持たない女性を守護し導く役としては妥当だと思った。

だが、今となつては別の意図もあつたのではないかと思わざるを得ない。

(……おれが人の姿をとると、文句ばかり言うくせに)

彼女の好みを反映した姿になれるシルバは、猫の姿と人の姿の二種類を持つ。

シルバの人間姿は昂にとつて好みすぎて刺激が強いらしい。

初めはその反応に面食らつたが、今となつては神の意図がわからなくて困惑する。

(手つ取り早く彼女を幸せにするなら、現地の人間でそれなりに稼ぎがある誠実な男を見つけて、とつとくつつけることなんだろうが)

その際にシルバという、好みの異性が傍にいて、果たして彼女はその気になれるだろうか。

幸せになれるよう尽力する役目なのに、それでは困るのだ。

(……まさか、万が一相手が見つからなかった時のことを考えてとか?)

あの神は、それらを見越してこの姿にシルバを作ったのではないかとそう勘繰ってしまう。さすがに考えすぎかとシルバはその考えを追いやって、また物思いに耽<sup>ふけ</sup>る。

(……姿を変えて、同性になれば一番だったんだらうが)

神に近い精霊には、一度姿を決めるとそれ以外の姿にはなれないという制約がある。

彼女が生活に馴染み幸せを掴むまで傍にいる。

それだけの話だから二つも姿があれば十分だと初めの頃のシルバは考えていたが、まさか性別の問題に直面するとは予想だにできなかった。

(同性であれば人間の姿のままデリラたちの世話になることも可能だったかもしれないし、いや猫の姿だからこそ彼女が結婚した後も見守ることが可能だと思えばこれが最適なはずなんだが) ずるりと力が抜けた昴の手が、シルバの体から離れた。どうやら満足して熟睡したらしい。

(……まったく)

眠る彼女のその様子にため息をついてから、シルバは人の姿になって昴の布団をかけ直す。

記憶喪失、そういう形で町に溶け込んだ昴は忙しそうにしながらもそれなりに充実しているように見える。初めの頃の怯えた様子に比べると最近は生き生きして見ていて面白い。

ちよつとばかり人の多い店だから警戒を怠らぬようには気をつけているが、幸いにも彼女に不埒<sup>ふちや</sup>な真似をするような輩<sup>やから</sup>は今の所おらず、シルバとしては一安心だ。

彼女が生来人懐っこい性格なのか大勢に可愛がられるようになったのはいいが、妙な奴が現れてはたまったものではない。折角笑顔が増えたのだから、邪魔しないでもらいたいものだ。

(それにしても猫好きってのは、面倒だな)

昂に手助けしてくれたデリラとセレンという母娘は親切でシルバにも良くしてくれる。

彼女たちが営む『銀の匙亭』で働く昂のサポートと警護を兼ねつつ、看板猫とやらをしているが、猫という生き物はどうにも人間に好まれるのか、あるいはこの町の人間に猫好きが多いのか。

昂から『看板猫というのは、店の人気者』だと耳にしていたシルバは大人しく、撫でてくる人間たちに少しくらいは触れさせてやっている。

ただ、しつこく触れられるのは気分が良くない。いい例がレニウムだろう。

その場合はすぐにその場から離れるのだけれど、猫だから許されるというのはなんとも便利だ。

(……あいつらに触れられるのは、面倒だと思うのにな)  
毛並みの柔らかさを楽しむように、確かめるように。

それでいて、こちらを気遣いながら触れてくるその指先は、嫌いじゃない。

もっと端的に言うならば、つまり彼がそう感じるのには、昂だけだ。

人の姿から再び猫の姿に戻ったシルバは、昂の傍らに寄り添うようにして目を閉じる。  
彼女の手がいつでも届くように、彼女が寝ぼけていても自分を探さないで済むように。

(……彼女は『ご主人様』なんだから仕方ない、か……)  
どんな存在よりも、彼女を優先に。

それが自分の存在意義なのだから当然だろうとシルバは思う。  
だが、そう思ったところで胸の中がもやっとした気がした。

その正体が不快感であることまで理解して、それが何故なのかを考えるが答えは出なかった。  
(……よく、わからないな)

人間と一緒にいて、なにかに感化されたのだろうかというところまではわかる。

シルバはまだ生まれたばかりの精霊だ。知識はあっても実際に見て触れて知るという、初めてのことばかりに振り回される。戸惑うことは当然だと思ふのに、戸惑うことに、また戸惑うのだ。

(人間は、不思議だ)

知識として知っていたことが、目の前にするとこんなにも違うなんて。

知らなかった、知っていたはずなのに。

シルバにとって毎日が発見であり、毎日がなにも知らない人間たちへの驚きで満たされる。

それはまるで、守るべき彼女と共に成長しているようでなんだか少しだけ、面白くない。

人間は脆弱な生き物だから守らなければいけないという意識しかなかったというのに、今では不思議なほどに興味を湧いている。

そして、同時に、何故か胸の奥が温かくなる感覚も。

ただの興味なのか、あるいは自分が知らない新しい感情なのか。

(……お前といったら、わかるのか。このおかしな気持ちがあるのか)

すうすうと眠る鼻の姿をもう一度だけ片眼を開けて眺めてから、シルバは再び目を閉じる。

『きみも、こちらに戻るまでは好きに生きていいさ』

そう笑って送り出したカミサマの、その声を思い出してイラッとしたのを誤魔化すように、シルバの尻尾がゆらりと揺れた。